

「日本の断酒会発祥 60 周年記念例会」が、9 月 28 日(土)東京都武蔵野市西久保コミュニティセンターにおいて開かれました。

高知市下司病院理事長下司孝之氏が、「重なる歴史の断酒会 今日を活かそう」と題して記念講演され、当会ブログ掲載了解いただき長文にて、その 1～その 4 まで 4 コマにて掲載させていただきます。

尚日本禁酒同盟ホームページに掲載されていますので、検索「日本禁酒同盟」にて閲覧下さい。

<http://nippon-kinshu-doumei.fd531.com/>

日本の断酒会発祥 60 周年記念例会 2013. 9. 28  
於 東京都武蔵野市西久保コミュニティセンター

## 重なる歴史の断酒会 今日に生かす

～下司病院と断酒会の歴史を踏まえて～

下司病院理事長 下司孝之

キー・ワード 「断酒会の原点」 「内から外へ」

今日は 60 周年記念例会にお招きをいただきまして、ありがとうございます。

小塩完次さんや山室武甫さんには父がお世話になりました。下司孝麿宛のお手紙が沢山残っています。

先頃なくなられた貴会の小塩政子さんは二度も東京から高知酒害サマースクールに来られているのにおっしゃらないものですから、ご紹介もできずに失礼しました。私の連れ合いも大学院の論文のことで貴会の 49 周年記念例会にお伺いして、お世話になりました。

下司孝麿は禁酒同盟からは断酒会結成後も大変なご指導を受け、貴会の禁酒新聞も度々断酒会の動向を掲載してくださりました。孝麿自身も亡くなるまで、永く顧問にまでさせていただいて恐縮の限りです。

### 1 断酒会のルーツ

断酒会のルーツ（源流）は禁酒運動です。

有名なところでは「青年よ、大志を抱け」の名文句で知られる北大クラーク博士が「学生が飲酒にふけり、学間を疎かにしている」様を嘆いて禁酒運動をしたことが知られています。

又、安藤太郎ハワイ総領事が日本からの出稼ぎサトウキビ刈り労働者が飲酒の悪癖に染まっているのを嘆き、樽を割って自らも禁酒に踏み切ったことが知られています。

禁酒は会ではなく「運動」から始まります。

アメリカではワシントンクラブの禁酒ステップに手を入れ AA は発展します。AA は会というよりは断酒以外は手がけない運動体です。

日本では戦後、日本禁酒同盟が断酒の会を発想します。1953 年、昭和 28 年 9 月 12 日禁酒同盟傘下に「断酒友の会」が生まれ、これが日本における最初の断酒会発祥になります。

運動で始まったものは収まりかえった「会」で終わらせては発展がありません。断酒会は自らの問題とするところは会の名前を使って運動できます。(AA は出来ない)

一般財団法人日本禁酒同盟 (Japan Temperance Union) は「酒害に関する知識を普及し酒害の予防及び酒害者の救済を目指す団体」で 1920 年設立されます。

禁酒運動の金字塔は 未成年者喫煙禁止法 明治33年 1900年  
未成年者飲酒禁止法 大正11年 1921年

を成立させていったことで、戦前もタバコよりも飲酒の法案に手を焼いて21年もの差が出来ています。やがて禁酒愛国・断酒報国の軍国主義へ巻き込まれていきます。ポスター標語にも『大東亜戦争に勝つまで酒をやめませう』『戦勝祈願断酒 酒代を戦費に』の文字が見られます。

禁酒同盟の加藤純二理事長（全断連顧問）は、全断連「かがりび」平成16年122号～平成17年125号へ寄稿してこうまとめています。

「禁酒運動は敗戦を機に『禁酒して対米英戦を勝ち抜こう』のスローガンが地に落ちてしまった。

明治初期から日本の近代化に尽くして日本の土となった多くの宣教師などの会員の献身があつたにもかかわらず、禁酒同盟が『鬼畜米英』の声に抵抗しなかったことに大きな悔恨の念が起こったのではないかと思う。組織がそれから立ち直るのは大変だったのではないか。それに対して、断酒会とその全国組織である全断連には戦争体験責任は無かったのである。」

禁酒運動を政治が悪利用した例です。

だからこそ全断連『指針と規範』・断酒会規範の十項『断酒会は政治、宗教、商業活動に利用されない。』とありますが、単に選挙に利用されないといったことではない大問題なのです。

現行憲法は国民主権ですから、断酒会を国家政策に奉仕させるべきではないと考えられることになりますが、戦前の歴史に学ぶことは充分になされていないように思います。

## 2 断酒会の原点

原点は酒害者民主主義だと思います。

『酒害者の酒害者による酒害者のための断酒会』（下司孝磨）

断酒会という言葉も禁酒運動が生み出した言葉ですが、禁酒運動の先進的な努力、工夫を取り入れて現在のアジア型というか、日本の断酒会を作り上げていきました。

キリスト教の影響も強い禁酒運動にして、よく断酒会の雛形を作り出したものだとご苦勞を拝察いたします。

横一列平等のAAには仲間を超越する神の存在を想像させ、西欧ならこれはキリストでしょう。

「断酒会は町内会や消防団などと同じ縦型組織ですが、横々運営を心がければ良い」（吉田建夫・高知精神衛生センター初代所長）の言です。

『病院と断酒会は平等』（下司孝磨）の原則に即して患者さんの主体性を認め、会が築きあげられて、大きな不祥事も無く全断連も50年間やってこられたのだと思います。

高度経済成長期に松村さんという優秀なオルガナイザーを得たこと、時と人の存在があればこそで、民主主義を尊重する運動として会を発展させてゆこうという近代的な考え方が重要であったと思います。

そこには実践を尊ぶ地道な現場があります。

それ以前の病者運動は結核患者を中心とする戦闘的な『患者同盟』があり、治療には栄養をつける場の施設が必要な時代の要請から文字通り食べるための激しい生活権闘争を繰り広げていました。

経済と断酒会が急拡張を遂げる1960年代の後半からは学生の異議申し立て運動にも触発され、医療被害・薬害・公害など、会社や国の政策を問いたず運動が盛んになります。

このような要求を掲げる運動の間にはさまれて出来た断酒会は第一義的に自らの問題に取り組み、他人の課題に取り組むことを立ち直りの最初期には戒めています。これは政治的に無自覚であれとする運動ではなく自分の足元を先ず固めるのが肝要なアルコール依存症の特質から取られた運動です。

これが「一日断酒、例会出席」の主テーマとして表されています。下司孝磨は新聞「断酒」4号より掲載された自らの断酒鉄言『酒をやめるにわけはない 一、今日一日だけ止めよう！ 一、例会に必ず出席しよう!』（1962.2）

が標語の元の言葉であったといっています。

国の社会保障政策や製造元責任を問う運動との違いが出たのは断酒会の持ち味でもあり、厚生省に『暴れる精神病院でも困り者のアル中の会』との警戒感を出させないようにしたからではないかと思います。

でも鉄言は「一日断酒、例会出席」のふたつにとどまらなかったし、政治的関心から遠のけというものでもなかったのです。

### 3 禁酒運動から断酒会運動へ

断酒会の原点はと問われれば、私は「酒害者民主主義」ではなかろうかと思います。

断酒会の最初期に提起された言葉ですが、下司孝麿は「酒害者の、酒害者による、酒害者の為の断酒会」として支援者による越権行為をたしなめていました。これが酒害者民主主義として定着してきたように思いますし、医療や、行政の過度の介入に対する規範として機能してきたことと思います。

下司孝麿は禁酒同盟から東京断酒新生会が独立する過程を目の当たりにしていますから、支援の限界を強く印象付けられたことでしょう。

これらの民主主義の理解は断酒会がAAの伝統から学びとったことでもあると思います。断酒会の順当な発展は戦後の民主主義感覚と合致して断酒会を発展させてきたといえると思います。

断酒会が創始者は松村春繁だと力強くいうのは、彼らのアイデンティティからであります。

今ここで、そもそも断酒会という言葉は断酒会が作った言葉ではなく、禁酒運動から生み出された言葉であり、原点の彼方に影響を与えた禁酒運動が源流としてあった歴史を確認する必要があると思います。

禁酒運動が近代日本の最初期から活動をはじめ、一定の社会的役割を果たしつつも、国家の戦争政策に飲み込まれ、「大東亜戦争に勝つまで酒をやめませう」という禁酒報国に墮して、酒害者や国民の利益から離れていったことが戦後期に禁酒運動が国民の支持を失った原因ともなったことと思います。

戦前の禁酒運動が、誰に依拠するのかを探り当て得ないで国家と容易につながった限界をここにみます。

禁酒同盟の機関誌「禁酒之日本」には名古屋大教授による酒害者は「断種」せよとの優性学的な論文が掲載されていますから、とても酒害者本人による断酒運動というところまでは意識が繋がらなかったのだと思います。

その禁酒同盟も断酒会を生み出す際にはAAに学ぼうとします。AAも戦後民主主義の申し子として取り入れられ、断酒友の会が日本AA支部を名乗ったことすらあります。

戦後の禁酒運動には、戦争への協力にいたった反省から、酒害者に向き合う努力がなされて、AAに学び断酒友の会、東京断酒新生会、断酒修養会などの開設運営がなされていったと思います。

AAは独立した存在ですから、断酒会も禁酒会から独立してゆくのも自然な流れだったのではないのでしょうか。また、戦後期の禁酒会は戦争への反省から反戦平和の理念を掲げ、戦後初のノーベル賞受賞者・湯川秀樹などの「世界連邦」創設への運動へ手を伸ばしていったのだと思います。組織は別でしたが禁酒会理事長に世界連邦を推進する片山哲元総理がなっていましたから彼の心情でもあったと思うのです。

余談ですが1960年、私も高校2年生のときに「世界連邦を作ろう」との主旨で学内弁論大会に登壇したことがあり、その雰囲気は分かります。残念ながら理想主義に過ぎ、よって立つ政治基盤が無く運動は広がりませんでした。断酒会は自助団体であります。現在の断酒会には、自分自身の断酒から、自分たちの断酒へ進んでいかなければ自分の断酒もおぼつかなくなるという確信部分が欠けていっているように思います。それは戦後の経済成長期にかもし出されたマイホーム至上主義・中産階級意識による狭い意味の個人主義による仲間意識の解体によるものと思います。

こうして断酒会の社会への露出度も少なくなっていくます。

そうした今、断酒会は誰と提携すべきか考えてみる必要があります。よく言われるのが、行政と病院との連携ですが、その二つともに行き詰っているのではないのでしょうか。「小さな政府」を掲げる社会保障政策により保健所は統廃合され、「役人を減らせ」で保健師さんは少なくなりデスクワークに張り付き、酒害家族教室はすっかりな

くなり住民サービスは減りました。

病院でもアルコール医療に取り組んでいるところも減少し、極端な自己完結医療もみられます。

むしろ、断酒会にとっての連携相手は他の病者運動であったり、市民であったりする仲間性に目を向けるべきではないでしょうか。

今一度、なぜ会なのか、なぜ全国組織が必要なのか問い直しが必要と思うのです。